

「緑の幼虫に大変身」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

3年生の子どもたちを見ていると、とにかくよく「集まる」何か事件が起きたり、変化を察知すると、誰ともなく集まってくる。特に生き物の変化には非常に敏感で、准光速か孫悟空の筋斗雲のごとく駆けつけ、すぐに人だかりができる。私はいつも出遅れて、仕方なく「昆虫を観察する子どもたち」を観察することになる。しかしこれがまた面白い。



「幼虫が脱皮してる!」「脱皮の一瞬!」「黒いやつが緑になった!」「うわあー、@*+%\$・#◎!!」「見せて見せて、見えない!」「かわいいー♪」



子どもたちの発見通り、ナミアゲハの黒い幼虫が脱皮して、まさに緑の幼虫になろうとしている一瞬だった。私が日頃、「一瞬を見逃さないように」と繰り返しているせいか、子どもたちも会話の中で「一瞬」

という言葉をよく使うようになってしまった。いや、これは良いことである。私も、どんどんふくらむ人垣をかきわけて、幼虫の変身の一瞬をカメラにとらえようと必死だった。しかし、子どもたちに背中をギューギュー押されてなかなかピントが合わない。



前から見ると、まだ複眼の先端(口)に、黒い殻が残っている。先端が眼と知っている子どもは、「サングラスしてるみたいだ」と言った。なかなかうまい形容だと思う。この「サングラス」は、脱皮の最後に、ポロっと落ちる。



脱皮の速度は意外と速い。幼虫が動かずに靴下を脱ぐような感じではなく、皮が葉の表面に固定されて、幼虫のほうが進んで抜け出すイメージだ。緑の幼虫が脱皮しても気づかないことが多いが、黒から緑は色や模様の変化が大きいので、一番劇的である。子どもたちも、この神秘的な大変身に感動したようだ。